

近代日本洋画の名作選展

ひろしま美術館コレクション

ひろしま美術館は1978年、広島銀行創業100周年を機に「愛とやすらぎのために」をテーマに開館した私立美術館です。日本の洋画は、油彩という新しい技法により、日本独自の感性を守りながらさまざまに展開しました。この展覧会では、ひろしま美術館の貴重なコレクションから、近代日本洋画の流れを約70点の作品でたどります。



岸田劉生 《支那服を着た妹照子像》 1921年

意志をもった眼ざしですわ。
白い肌、衣装の布地や刺繍飾り、
ビーズの質感に注目してみましよう。



玉川上水を描いたと思われます。
村角線に沿って斜めに遠近法が強調されています。

劉生にとって写真とは自分の内面を掘り下げることでした。

岸田劉生 《上水の春日》 1915年

鴨居玲 《白い人(A)》 1980年



自然な姿で細部に至るまで
描きこまれた女性像です。
輪郭の赤い縁取りが印象的です。

近代日本洋画 - その展開 -

明治から大正にかけて培われてきた日本の油彩画は、画家が何のために描くかを問いつつ、脈々と引き継がれてゆきます。鴨居玲は人間の弱さや醜さを直視し、人間の内面を描き続けました。

スペインに住んだ4年余りの暮らしの中で
老人や酔っ払いなど弱い立場の人間に
目を向けて描いた絵画です。



鴨居玲 《私の村の酔っ払い(三上戸)》 1973年頃

近代日本洋画の名作選展 ひろしま美術館コレクション

2021年5月15日(土)~7月4日(日)

そごう美術館[横浜駅東口 そごう横浜店 6階]

郵便番号 220-8510 横浜市西区高島2-18-1

電話 045(465)5515(美術館直通)

<http://www.sogo-seibu.jp/common/museum/>

[編集・発行] そごう美術館 2021年5月



SOGO

横浜

www.sogo-gogo.com

人物画

黒田清輝が西洋からもたらした明るい外光表現により明治洋画界は大きな転機を迎えました。

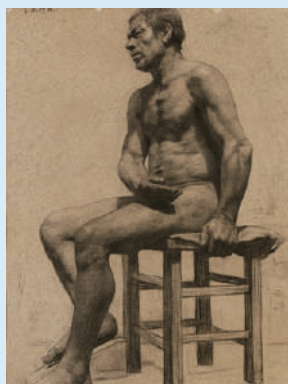
明治の終わりに留学した安井曾太郎は帰国後、フランスと日本の風土の違いに苦しみ、人物画において独自のリアリズムを追求しました。



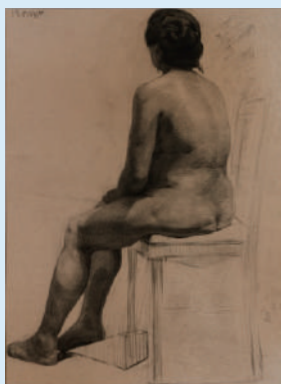
まだ日本で裸体に対する抵抗があった時代、何気ない日常に紛れこませて巧みに表現しています。



手をかざした女性の顔や衣服などに降り注ぐ陽光の表現に注目!



安井曾太郎 素描 1905年



安井曾太郎 素描 1905年

人物デッサン

安井曾太郎は当時珍しかった裸体画の人物デッサンを学び、確かな描写力を身につけます。パリのアカデミー・ジュリアンでもその力を発揮して、たびたびコンクールで受賞しました。

風景画

明治から大正における風景画の展開は、外光派の影響による自然主義的な「ありのまま」の風景画から、画家の内面も表す構想画的な風景画に変化してゆきました。



古賀春江 《風景》 1923年頃



岡鹿之助 《積雪》 1935年

おとぎの国のような、当時画家が住んでいた福岡の街並みや、やわらかな水彩画で描いています。

フランスの風景ですが、画家が想像した夢の世界のようです。大きな川を中々に、空間が広がり、奥行きが巧みに表現されています。

モチーフが簡略化され、雨が浮世絵版画のように描かれているのに注目!



児島善三郎 《田植》 1943年

静物画

静物画は風景画とは違い、画家が自由に配置を変えて構図を決めることができることで、かえって不自然な構図になると小出は言います。その危険に挑戦するように小出は繰り返し静物を描きました。



小出権重 《地球儀のある静物》 1925年

ガラス絵を制作するための道具や、愛用したガラス器や地球儀が描かれています。